一つ家の鬼娘！

ぱんくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
一つ家の鬼娘！

【Ｎコード】
Ｎ５０５２Ｗ

【作者名】
ぱんくん

【あらすじ】
「安達ヶ原の鬼婆」と「浅茅ヶ原の鬼婆」。
二つの物語が交差し、平凡な高校生「遠藤芳樹」に降りかかる。
「何故自分が」と悩むが、そこには抜け出せない運命があった。

ハタシワダレ

昔、東京に鬼婆が居たという。
詳しい事は分からないが、俺はその鬼婆と関係がある池の跡地の近くに住んでいる。
どういう関係かは分からないし、特に怖くもないのでこんな薄暗い午前3時に散歩している。

「ねーみ。」

夏なのでそんなに寒くない。むしろ暑い。
なぜこんな時間に散歩しているか気になるだろう。簡単に言うと寝ないようにだ。何故寝たくないかと言うと、今寝ると学校に遅刻するからだ。
俺は夜遅くまで起きていると朝起きられないから寝ないで学校にいく。
だがしかしその後遺症として、授業中に恐るべき眠気に襲われる。
その時は、身を全てまかせ気持ちよく寝る。

「う‥‥。うううぅ‥‥。うぅ。」

マジで?見間違いだよな?俺の視力はアフリカの先住民なみだぞ?
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はっきりと白い女の子が見える。

「あの〜‥‥」

「うわっ!」

「すっ、すみません！脅かしちゃって」

幽霊の癖に人間に話しかけてきた。

「あのぉ、大丈夫ですか？」

「あっ、あぁ。大丈夫。うん」

ま、普通の人間だろうね。幽霊なんている訳ない。この辺になら、鬼婆の怨霊でも居て良いと思うけど。

「あの、こんな時間になにしてるの？」

「すみません。道が分からなくなっちゃって」

「そうなんだ。俺で良ければ案内するよ」

暇だし結構可愛い子だし。

「ありがとうございます。この近くに池はありませんか？」

ん？池？この近くに池は～・・・。あぁ。

「この近くに昔は池があったらしいけど、もう埋め立てられちゃったよ？」

「えっ？」

なんだろう。俺が生まれてくる前に埋め立てられたらしいけど、知らないのかな？それに見たことない子だけどここらへんの子だろ。

「えーと、俺、遠藤芳樹。君は？」

「私？私は……、誰？」

えと、これは～……

記憶喪失？

いみわからん

俺は一人暮らしだ。親父は仕事で海外だ。お袋はそれについていった。理由は仕事先がワイハだからだ。子供よりワイハをとった。俺は一人暮らしだ。だった。だったらしい。さっきまで。

「早くしろよ～。早くメシ作れよ～。家出しちゃうぞ～」

これがだれだかわかるか諸君。さっき会った女の子だ。池の跡地まで行こうとしたら

「あなたの家ってこの辺ですか？のどが乾いたのでお水が欲しいんですけど・・・」

自販機ないし家近いから家まで連れてきたら、

「いいお家ですね。お一人で暮らしているんですか？」

って聞いてきたから「はい」と答えたら

「良し決めた！俺ここに住む！お前俺の召使いにしてやる！メシ作れ！」

普通の人なら理解出来ないだろう。

「おい何してんだ。早くしろよ召使い」

「あっ、あれ？キミ女の子だよね？てかこの家に住む？召使い？」

わけわからん。

「当たり前だ！女に決まってんだろ！ナイスバディーすぎるだろ！」

「え、ええと、召つ・・・・」

「早くしろ！ハラへった！」

で、

「早くしろよ～。早くメシ作れよ～。家出しちゃうぞ～」

意味分からん。家出してもらいたい。てか住むとか冗談だよな？

兎に角うるさいからメシを作ることにした。

俺って優しいよな。

いみわからん（後書き）

こいつッッッ

暗い。クライ。苦しい。クルシイ。ここは。ココハ。どこだ。ドコダ。私は。オマエハ。誰だ？　オマエハ！

「ッ！？　あ、あレ？ここハどこだ？俺は……確か……………？」

わからない。自分が誰かも、ここがどこかも、何もわからない。なんなのだろう。よく分からないけどなぜか、凄く悲しい。分からないが、何かに溺れていた気がする……。

まあとりあえず家に帰……れない。分からない。でも、凄く温かいぬくもりがある家が会った気がす…ッ…！？

「コロセ！！キリサケ！！カミクダケ！！アイツヲ！！」

ッなっ、なに？さっきの？殺す？誰を？切り裂く？何を？

……………………。

と、とりあえず。何かに溺れていた気がするから海とか池を探そう。

ん？あそこにバカそうな男がいる…………＜ニタァ

ケッケッケッ。家発見だな。ククク

「あのぉ…………

……………………」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「で、こうなったわけか」
「うん、このオムライスそんなうまくないな。むしろへた」
こいつっ
「ふぅ。まぁとにかくソレ食ったら出てけ」
「ゴッゴホゴホッ……うぇっ」
むせたよきったねーなー
「おっ、おまっ……ゴホッ……ッ……うぇっぷっ……」
「おいおい大丈夫かよ。女なのにカワイクねー」
「お前はこんな身よりのないか弱き乙女に家から出てけっつったんだぞ！」
「当たり前だ！第一まだ名前も知らない女子と一緒にくらせるか！！」
「男なのに根性ねーな！タマ千切るぞ！」
「か弱い乙女がそんなこといってんじゃねぇ！それに男だから気にすんじゃねーか！」
「メンドクセー奴だな！お前なんかといたいと思う奴ぜってーいねーよ！」
「じゃあ出てけ！」
「えっ？」
おぉ？
「いっいやっ、べっ、別に本気でいったんじゃ………んぅ………っ」
おぉ。恥ずかしがってる。結構カワイイかも。
「いっ、いいから俺をここに住まわせろ！このクソハゲカス！」
いや、そうでもねーな。
「取りあえず名前教えてくれよ」
「は？」
「いや、名前。」

「お前人の話聞いてたのか？記憶喪失で忘れちったよ」
「え？本当に記憶喪失なのか？」
「当たり前だ！でなきゃ家でねてるよ！！」
うーん。本当に記憶喪失か。どうしよう。交番？病院？病院やってっかな？今何時だろ・・・・・ってあぁ～～～！！！！！
「あんだようるせーなー」
「お前と話してたら８時になっちった！！！学校遅刻やん！！」
「学校遅刻を俺のせいにすんなよ！」
「あぁ～～もうっ！！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・学校ってなぁに？」

こいつッッッ

こいつッッッ（後書き）

次回をお楽しみに！

池にある

とりあえず俺は学校に来た。名無しの女は家から追い出し、鍵をバッチリかけて家を出た。女は池を探すらしい。
「池が凄く気になる。池にはゼッテーなんかある！」
水だよ。池にはゼッテー水があるよ。まぁ面倒だからいわなかったケド。
一時限目は理科か。移動があるな。
「おい遠藤！理科室いこーゼ！」
「おう。てかお前声うるせ。」
「お前の聴覚がすげーんだって。ハッハッハッ！」
ハハハじゃねぇよ。横山とは中学からの友達だ。下の名前は忘れた。悪い奴ではない。
「なぁ知ってるか？」
「何を」
「お前が住んでる所って、昔鬼がいたんだってよ」
「聞いたことあるわ。それ」
「でさぁ、歴史のレポートそれにしようぜ」
こいつは何言ってんだ。噂を調べてどうする。
「割と有名なはなしでよ、［三枚のお札］っ言う昔話しってるか？」
「あれだろ？山姥から三枚のお札をつかって逃げるやつ。」
「あぁ。それと関係してるらしい」
「ほんとかよ」
「それを調べに今日、図書館にいこう」
メンド。でもまぁ、いいか。早くレポート書こう。

放課後だ。
「うしっ！じゃあ行くか！遠藤！
「おう」

……

結構早くついた。そして早く資料がみつかった。
正直驚いた。伝説の名前は［浅茅ヶ原の鬼婆］というらしい。
近くの池の跡地がどういう物かも分かった。

少し、ほんの少し、恐怖を感じた

池にある（後書き）

「浅茅ヶ原の鬼婆」（あさじがはらのおにばば）は、ちゃんとした昔話です

安達ヶ原の鬼婆

昔、京の都に岩手という女性が三人の娘と幸せに暮らしていた。
ある日、長女が病に掛かり喋る事が出来なくなってしまった。
占い師曰わく、「腹の中の赤子の肝を与えれば病はなくなる」
とのこと。
岩手は三人の娘を残し北へ旅立ち、奥州の安達ヶ原にたどりつき、
そこの小屋で獲物をまった。
何年かたち、一組の若い夫婦が一晩泊めてくれと訪ねてきた。な
んでも、婦の腹には子がいるという。
岩手は夫が出かけている隙に婦の腹を切り裂いた。そして喜びに
浸った。「これで娘の病は治る」と。
岩手は笑いつづけた。笑い疲れたころに、夫が帰ってきた。
夫は鳴きながら婦の名前を叫んだ。そんな夫を岩手は、

殺シタ

首を切り裂き、はらわたをえぐり出した。
あとは京にかえり、娘に会うだけだ。だが、岩手はきずいてしま
った。夫の叫んだ名前。
どこかで聞いたことがある。不意に、夫婦の肉塊に目をやると婦
の手にお守りが握ってある。それを見て岩手は全てを悟った。
殺したのは自分の助けようとした娘で、自分は娘とその夫と孫を
自分の手で八つ裂きにしたのだ。

岩手の頭は乱れ、宿を借りにきたものを全員殺した。

岩手は鬼婆となってしまった。

安達ヶ原の鬼婆（後書き）

次は三枚のお札です

三枚のお札

殺戮を繰り返した岩手のもとに、一人の坊主が宿をかりにきた。
岩手は坊主が寝ている隙に坊主を殺そうとしたとき、坊主はそれに気ずき、一目散に逃げ出した。
岩手は坊主を追いかけた。坊主が札を投げると、札は大河になった。
岩手は大河の水を飲み干し、さらに坊主を追いかけた。坊主が２枚目の札を投げると、札はアリ地獄のようにになった。岩手は先ほど飲んだ水を吐き出し、砂を滑らないようにしてさらに坊主を追った。
坊主が三枚目の札を投げると、札は炎になった。岩手は火傷をして気絶してしまった。

目が覚めるとそこは知らない所だった。どうやら家のようだ。
「お母さん！良かった！目が覚めたのね！」
知らない女性が二人いた。話を聞くと、二人は自分の娘で、姉の事をしり、安達ヶ原（奥州）まで岩手を探しに行き、倒れていた岩手を近くの街まで担いできて、医者に治療してもらったそうだ。
その後、岩手は浅茅ヶ原（江戸）で娘と宿屋をしながら幸せに暮らした。

三枚のお札（後書き）

次回は浅茅ヶ原の鬼婆です

浅茅ヶ原の鬼婆

岩手は娘と宿屋をしていたが、最早鬼婆となっしまい、旅人を殺す事を止めることは出来なかった。

岩手は旅人の頭を石で割り、賃金を奪ってから近くの池に遺体を捨てていた。娘はこの行いを見て見ぬふりしていた。

死者が９９９人に達した時、一人の若い男が宿を借りにきた。

男と三女は恋に落ちた。それを知った次女は男に訳を説明し、三女を連れて逃げるように言った。だが逃げた事が分かれば岩手は男を追う。次女は自分が囮になると決めた。

夜になり、岩手はいつものように寝ている旅人の頭を石で殴り殺した。

旅人の体をまさぐっていると、妙な事に気ずく。旅人は男の筈なのにまるで女のようだ。

死体の顔をみて仰天した。そこには自分の娘がいた。岩手は自分の娘を二人も殺してしまった。

岩手は鳴きながら娘の死体を抱き、いつも死体を捨てていた池に身を投げた・・・・・・・。

「それがあの池か……。」
俺は図書館で借りた本を読みながら呟いた。
なんと言うか、驚いた。結構マジメな話だったな。
「その話にゃ続きがあるぜ」
「うわっ！いつ入ってきた！なんで帰ってきた！」
「自分ちに帰って悪いか？」
この女マジか？てか何かテンション低いな。何かあったのか？
い、いや。心配してるとかそんなじゃないゾ？
「何ブツブツ言ってんだよ」
「いっいや！別に。」
聞こえてないよな？エスパー？
「てか、続きってなんだよ。記憶なくしたんじゃねーのかよ」
ちょっと意地悪に言ってみる。
「さっき思い出した。」
コノヤロッ
「全部思い出した。名前も、過去も、自分がどんな奴かも。」
？
「兎に角その話の続きを話すよ」

なんかしおらしい。落ち着かないな。

浅茅ヶ原の鬼婆（後書き）

コメント頂ければ光栄です。

関係あるさ

何なのだろう。落ち着かない。朝は凄くうるさかったのに、今は不自然なほど静かだ。何かあったのだろうか。

「お前、今日どこいってたんだ？何かあったのか？」

「お前にゃ関係ねーだろ」

確かに関係ないが、何か気になる。しゃあねぇ。

「関係あるさ。俺はお前の家族だ」

あーはずい。「あるさ」ってなんだよ。「さ」って。

「ここに住むの認めてくれんのか？」

「まあな。兎に角記憶治ったなら名前を教えろ。んでなにがあったかおしえてくれ」

「あぁ。じゃあとりあえず、俺の名前は野菊（のぎく）だ。」

名字……じゃないか。変わった名前だな。

「信じてくれないだろうけど、俺は……」

話をきいて驚いた。正直、信じられない。俺は言葉が出なかった。

関係あるさ（後書き）

見てくれてありがとうございます。

野菊

岩手の手からにげた男と三女は数ヶ月後、事件があった浅茅ヶ原の家に戻り、幸せに暮らしていた。

だが、岩手の噂は江戸中に広まっていて、男と三女の心を苦しめた。

そして男はストレスから女と浮気をした。だが、三女は咎めることなく男を愛し続けた。

ある日、男は知らない女を連れてきた。いや、知っている。男の浮気相手だ。その腹は大きくなっている。

男は口を開いた。

「このとうりだ。私はこの女と子を作った。この女を愛した」

知っている。以前から知っていた。でも、それでもよかった。

「知っていたわ。でもいいの。それでもあなたを愛してる」

「……離縁しよう」

「……？」

何故？三女は男を愛してるのに。何故、離縁なんてする必要がある？

それは至極簡単な事だ。

「私はこの女を愛している。お前を愛することはできない。離縁をしよう」

三女は怨みを覚えた。それが誰に対してか分からない。三女は無意識に包丁で男に切りかかった。だが逆に男は三女を殺した。

こうなることはわかっていたのだ。何せ、三女は鬼婆の娘だ。

さらに言えば、男は離縁などする気はなく、最初から三女を殺し

にきたのだ。

男は三女の遺体を岩手が身を投げた池に捨て、浅茅ヶ原の家で女と仲むつまじく暮らした。

「この浅茅ヶ原の鬼婆という話は、一つの家でおきた事件だからのちのち、一つ家の鬼婆とも言われるそうだ」

うーん‥‥。謎だ。色々気になる所はあるが、一番気になるのは何故、こんなにくわしい？

記憶を無くす前はオカルト好きだったのか？

「おい。何黙ってんだ」

「あっ、あぁ。悪い。でもよく知ってるな。こういうの好きなの？」

「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。」

やべ、禁句か？

「え、えーと、野菊だったよな？い、いやー変わった名前だね。」

「‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥。」

さすがに失礼か。

「な、名前といえば、登場人物の名前がわかんないから面倒だな」

「‥‥‥‥‥‥知ってるよ。名前」

やっとしゃべった。
「へ、へー。凄いね！よく調べたよ！うん！」
「……。」
「じ、じゃあ三姉妹の名前教えてよ」
「……長女が桔梗（ききょう）。次女が笹百合（ささゆり）」
「三女は？」
「三女は……三女は……」
どうしたんだ？忘れたのか？
「三女の名前は……野菊」
「ん？野菊？野菊ってお前と一緒じゃん。あ、もしかして三女ってお前なんじゃね～の～？」
ちゃかしてみた。
「……ん」
まじで？

家族

普通は信じない。目の前にいる女は鬼婆の娘で、何十年、何百年も前に死んでいるんだ。だが俺の中の何か、いや、誰かが

「彼女を信じ、彼女を受け入れ、彼女を愛し、彼女に許しを請え」

と呟く。誰かはわからない。聞いた事もない。

「わるいな。信じないよな、こんな話。忘れてくれ。」

凄く寂しそうだ。放っておけない。いや、放ってはいけない気がする。

「いや、信じる。お前を信じるよ、野菊」

「え？何でだよ。普通は信じないだろ。お前の頭おかしいんじゃねーか？」

「確かにおかしいかもな。でも、お前を放ってはおけない。記憶は全部思い出したのか？」

「い、いや、まだ少し曖昧な所がある・・・・・けど」

「なら少しの間、記憶がはっきりするまでこの家に住むといい」

「いいのか？」

「あぁ。家族にしてやるって言ったしな」

何故か抵抗がない。この女、野菊と家族になり、共に生活するのは運命なのかもしれない。

「あ、ありが……と……う」

「泣いてんのか？」

「ば、馬鹿……。お……俺が……泣くわけ……ない……だろ」

「強がりやがって……。」

野菊に聞こえないくらいに呟いた。俺は微笑んでいた。野菊のこういう所、嫌いじゃないらしい。いや、むしろ……。

「ケッ、らしくねえか。お前も泣くなんてらしくないぞ、野菊。」

「だ、だから泣いてねーって！」

「ハハハッ」

「わっ、笑うな、ボケ！！」

「さぁ、もう夕飯だ。何か作るか？」

「オムライス」

「いいぜ！得意だからな！」

「不味いけどな」

「うるせぇ」

何かコイツ、昔の人なのに現代的な言葉つかうよな。服も着物とかじゃないし。

まぁ今度聞けばいいか。取りあえずオムライス作ろう。野菊うるさいからな。

「なぁ野菊」

「んあ？」

「これから宜しくな」

「い、いいから早くオムライス作れ、バカ芳樹！」

「はいはい」

ホント素直じゃないな。まぁそれがいいとこか。

ふと野菊を見ると、何やら旅番組を見てるらしい。箱根か？

「なあ芳樹～」

「ん～？」

「新婚旅行ここなんてどうだ～？」

「……は？」

「だ～か～ら～、新婚旅こぉ～」

何いってんだ？この女。

「え～と、誰の？」

「バカッ！俺達のに決まってんだろ！」

「なんだよ新婚て！」

「だってお前が言ったじゃねーか！家族になろう、一緒に住もうって！」

「いやいやいやっ！そう言う意味じゃないからっ！」

オムライスを作る手は止めない。

「子供は何人がいいんだ？１０人でも２０人でも俺頑張るぜ？おっと、夜が大変だなぁ。少しは寝かせてくれよ？」

「バッバカ！なにいってんだ！恥ずかしくないのか！」

そんな話をしながら割った卵は双子だった。

家族（後書き）

ユニーク１００人超えました。ありがとうございます。

頭痛

あ～。寝れなかった。もう昼の１２時だ。昨日寝たのが深夜３時ぐらいだから大体～・・・・・・７時間？８時間？まぁそんぐらいか。そして隣にはトンデモ女野菊が寝てる。嫌、何もなかったぞ？ただ一緒に寝ただけ。

寝るときに野菊が

「子供欲しいだろ？早くしようぜ？」

と言ってきた。野菊曰わく、「男がリードしなきゃいけねぇ」らしい。俺はそれを利用して、とりあえず一緒に寝て、そのまま放置した。賊に言う「サイテーな男」だ。でも野菊だから別にいい。

「おい野菊。朝だぞ、起きろ。」

ん？何かうなされてる。

「おいどうした野菊。大丈夫か？」

「う、うぅ。頭が・・・・・・いた・・・・い」

おいおい大丈夫かよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝数分後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おいテメェ！どういう事だ！女の子を放置プレイって！」

「朝（昼か）からうるせーなー。そんな事より頭大丈夫か？」

「テメェ～（怒）二人の愛の育みをそんなことってなんだ！しかも人を変人あつかいか！」

「いやいや悪かった。主語がぬけてた。さっき頭が痛いってうなされてたから」

「ぁあ？そんな事いってねえ。今は頭より愛の方が大事だ！」

朝から疲れるなー。今日学校休みでよかったわー。しかもあと3日行ったら夏休みだし。

とりあえず朝メシ食うか。

「野菊、お前何か作れるか？」

「卵かけご飯」

「チャーハン作ってやるよ」

「チャ～ハンって？」

「見りゃ分かる」

こいつの生きてた時代にチャーハンはないのか。……？

こいつの生きてた時代？こいつの生きてた？生きてた？

「な、なぁ野菊？」

「ん～？」

「お前は何年も前に死んだんだよな？」

「あぁ。殺された」

「お前は今なんなんだ？もしかして、幽霊？」

「いいや。ちゃんと心臓は動いてるぞ？まぁでも３００年も生きる人間もいないだろ」

聞かなきゃよかった。少なくともこの女は人じゃないって事か。

野菜炒め

ねーみ。もう朝だ。しかも今日から学校だ。とりあえず野菜起こすか。

「おい、野菜。もう朝だぞ。起きろ。」

っていねえし。もう起きたのか？あいつが早起きなんて、何か違和感があ……

「朝だぞ、起きろ！バカ芳樹！！」

「うわっ！」

いきなり、ドアをぶち破る勢いで野菜が部屋に来た。

「朝ご飯作っといたから、早く準備して学校遅刻しないようにいけよ？」

つって元気よく部屋から出て行った。何なんだ？兎に角飯食うか。

「おう芳樹！冷めねーうちに朝飯食え！」

テーブルにはご飯と野菜炒めと味噌汁がおいてある。

「なぁ。これ全部野菜が作ったのか？」

「当たり前だ！他に誰がいるんだ？」

野菊は台所から叫んだ。今度は何作ってんだ？
俺がテーブルにつくと、ほぼ同時に野菊が向かい合って座った。
「うまいか？美味しいか？」
ジァイアニズムかよ。まだ食べてねぇし。
じゃあとりあえず、野菜炒めを食べてみるか。
「な、なぁ野菊。これホントにお前が作ったのか？」
「お、おう。美味しくないか？」
「嫌、凄くうまい！驚いた！」
「ホントか！？良かった！」
凄く嬉しそうだ。コイツは時々、女の子らしい可愛い顔をする。
俺は野菊のそう言う所が、凄く愛おしく思える。
「じゃ、俺もた～べよっ。」
野菊が箸を取った。何か、一人じゃない朝ご飯は久々だ。最初に
野菊がここに住むといった時は驚いたが、案外悪くない。
「おい芳樹、早くしないと学校遅刻すんぞ」
「ん？あ、あぁ。」
変なこと考えてないで、飯食べて早く学校行こう。遅刻やだし。
今何時だろ。

「……あぁーーー！！！」

「うわぁ！なんだよ、びっくりさせんなよ！」

何だ、自分の事は棚に上げやがって。ってそんな事言ってる場合じゃない！もう８時１０分！遅刻寸前だ！

「悪い野菊！学校遅刻しそうだからもう行くわ！」

俺は急いで家を出ようとした。

「まて芳樹！お弁当！」

「あ、ありがとう。コレも野菊が？」

「お、おう。残してくんなよ！」

「あぁ勿論！じゃあなっ！」

「ま、まて！もう一つ！」

「今度はなん……」

チュ～～～～～～ゥ

ん？何がおきた？唇に柔らかい物が、少し強めに、ぎこちなく当たっている。

「いっ、行ってらっしゃいの、チ、チュウ……だ。」

「……え？」

「は、早く行け！遅刻するぞ！」

「あ、あぁ。いってき……ます」

俺は玄関のドアを開けた。

「は、早く……帰って……こい…よ」

「ん？何か言ったか？」

「バ、バババ、バカ！！！何も言ってねえよ！早く行けクソ！」

ゲシッ！！！

いって！！あの野郎、人の事蹴りやがった！

……ファーストキスが野菜炒めの味だった……。

野菜炒め（後書き）

いつも読んでくださり、ありがとうございます。

弁当

一騒動のあと、俺は学校に来た。今は休み時間だ。騒いでいるおそらくサッカー部と、それをみて笑う女子。俺アイツらみたいな女子なら野菊の方がまだマシだな。

「なーにがマシなんだ～？」

「うわっ！なんだ、横山か。」

コイツは横山。名前は知らん。中学のころからの・・・デジャヴ？

「それよりよ～。レポートどうすんだ？ちゃんと調べたか？」

あぁ。コイツ前に登場してたな。一緒にレポート書こうとかいって。その内容は・・・・。

「なぁ横山。やっぱり違うヤツ調べようぜ？」

「おいおい冗談よせよ。俺メッチャ調べたぞ？」

横山には悪いけど、野菊の事を考えるとなんつーか、な？

「俺チョー調べたんだ！何か・・・」

そう言って野菊が話してくれたことと同じような事を、淡々と話し始めた。ただ、一つ新しい情報があった。野菊を裏切った男、つまり野菊の夫の子孫がこの時代に生きてるらしい。

横山は

「あくまで噂。だいたい、作り話の登場人物の子孫なんているかよ」

と言ってたが、俺は野菊が居るから信じるしかない。なんて考えてたら午前の授業が終わり、昼休みになった。

「おい芳樹～。学食いこうぜ？」

「おうよ」

俺と横山はいつもこんな感じだ。なんつーか、コイツはあきない。だいぶ仲が良い。と自分は思っている。コイツは知らんが。

「さて、今日は何にしようかな～」

俺が何買うか迷っていると

「どうせコロッケパンだろ？」

クソ、横山め。俺だってたまには違うのも食べる。

「そういうお前はどうせサンドイッ・・・」

ってもう買ってるし、サンドイッチ。

「お前いつもサンドイッチて言うけどさ、俺的サンドウィッチだと思うよ？」

また意味分からん事いってきやがった。

「バカ。ウィッチだと魔女が作ったみたいだろ」

なんてくだらないこと言いながら、俺はコロッケパンを買った。

「よし食べるか！」

何かいつもコイツと食べてるな。

「あ」

「？どうした芳樹。」

そうだ。思い出した。今日は野菊が弁当作ってくれたんだ。しゃあない、今は弁当食べてパンは野菊にお土産だな。

「パン食べないのか？」

「やらん。」

弁当を出したら横山が絶叫し、「もう一緒に食べてやらん！」と怒鳴った。明日から一人で弁当か。

悩み

よしっ。学校終わったから帰るか。野菊の弁当がスゲー美味かった。

「ふぅ。」

ため息ついちった。さてどうするかな。

野菊を裏切って、しかも野菊を殺した男の子孫が、今生きている。勿論、その子孫は野菊とは関係ない。でも野菊がそれをしったらどするだろう。

野菊は裏切った男を恨み、殺そうとした。だが逆に殺され、裏切った男は幸せに暮らし、子を残した。

どうするかな～。野菊に言うべきか、いわざるべきか。

迷ううちに家についてしまった。結局どうすりゃいいんだか。

「ただいま～」

「う、うぅ。うぅぅぅ・・・」

ん？なんだ？変なうめき声がきこえる。野菊か？

「お～い。どしたん・・・・・・！！」

「ぐ、ぐぁぁぁ・・・」

野菊が頭を抱えてうずくまっていた。

「お、おい野菊！どうしたんだ！？大丈夫か！？」

「ぐ、あ、頭が・・・痛・・い。」

頭？前にも頭が痛いと、うなされてたが、なんなんだろう。病気か？

「と、とりあえず、病院か？救急車？どしよう！」

やべ～。超テンパってる。ヘタレすぎるな。

「いや、大丈夫・・・だ。芳樹のおかげで落ち着いた。」

俺なんもしてないけど。

「とりあえず今日は休め。今度様子を見て病院にいこう。」

「い、いいよ！俺は大丈夫だ。病院なんて・・・いい。」

「いやいや、前も頭痛いっていってたやん！今度の休みに病院いこう。いったほうがいいって。」

「いいって！頭なんか痛くない！病院なんていかなくていいんだよ！」

？なんでこんなに病院いきたがらないんだ？

「それより芳樹！ちゃんと弁当食べたろうな！残してたら承知しねえぞ！」

「あぁ、ちゃんと美味しくいただきましたよ。コレ、間違ってか

ったパン。やるよ」

「お、おう」

「さて話を戻して、今度病院いくぞ。」

「クソッ」

「話の逸らしかたが強引なんだよ。で、なんでそんなに病院がやなんだ？」

「べ、別にっ！別に病院いくほど痛くねーからだよ！」

コイツまさか・・・

「なぁ。お前もしかして・・・・病院怖い？」

「！」

ずぼしか。

「いいいいいやいや！別に怖くねぇよ！怖いわけねえよ！」

「怖くないなら次の休みは病院だ。」

「う、うぅぅ・・・。どうしてもか？」

「いいや。様子を見てだ。よくなれば行かない。」

「ほんとか！？」

「あぁ。だから病院いかなくてすむように、今日はもう寝ろ」

「おう！じゃあ俺もう寝るわ！おやすみーーー！！」

「おやすみ。」

何か・・・・あつかいやすっ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さて、風呂も入ったし、もう寝るか。野菊にあのこと言うかいわないか、まだき決めてない。まあ明日考えるか。今日は寝よう。

俺は自分の部屋にいった。が！！！

野菊のいびきがうるさいので今日はソファァーで寝る事にした。

悩み（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございまーす。

当然の一撃

もう朝か。ソファーで寝たから首が痛い。野菊はまだ起きてないようだ。昨日すげー早く寝たのにまだ起きてないって事は、結構具合が悪いのかもしれない。

今日と明日学校にいったら夏休みだ。なるべく早く、野菊を病院に連れて行こう。

7時半か。準備してもう学校に行こう。・・・・？

心なしか、リビングが片付いているきがする。溜まっていた洗濯物や食器も洗ってある。もしかして昨日野菊がやってくれたのか？

きっとそうだ。アイツはあんな性格だが、割と家事が出来るらしい。

「ん～。おはよう芳樹～」

「あぁ、おはよう野菊。具合はどうだ？」

「おう！バリバリ元気だぜ！」

なんか小三の男子みたいだな。

「つーか芳樹、早く起きたなら俺の事起こせよ。」

「ん？あぁ、昨日頑張ってくれたみたいだからな。今日は休ませてあげようと思って。」

「昨日？昨日なんかあったか？」

「掃除とか洗濯とか、野菊がしてくれたんじゃないのか？」

「なんだ、そんな事か。そんなの嫁として当然だっ！」

あぁぁぁ、そうだった！　コイツ嫁になった気でいるんだ！

「子作りの前に、まずは嫁らしくしないとなっ！」

そうか！だから昨日あんなに頑張ったんだ！「いってらっしゃいのキス」とかいってファーストキスを野菜炒め味にされたんだ！

「家事は得意だ。ちゃんとお前の部屋も掃除したぞ？」

「なに！？」

「おう！ちゃんとすみずみまで・・・あっ！」

どうしたんだ？

「あっ、あのっ・・・その・・・」

なんだ？歯切れが悪いな。

「お、お前がっ、そういうの・・・好きなら・・・」

顔を赤くしている。まさか！

「お、お前がそういうの・・・好きならっ！俺っ、鞭も紐で縛るのも頑張るからっ！！お、おおお、おしりの、方・・・でも・・・」

「や、やめろーーーー！！！！！」

叫びながら自分の部屋にダッシュ！！
ヤバイヤバイヤバイ！！！完全に見られた！ベッドの下が片付いてる！

「よ・・・芳樹？」

部屋の扉の所で、野菊が顔を赤くして立っている。

「芳樹・・・。」

「ち、違う！これは俺の友達の横山って奴が・・・！」

「芳樹。お、俺・・・今からでも・・・」

「だ、だだだ、だから！これは友達の横山が置いてっただけで、けっして俺の趣味ではない！」

「い、いいんだぜ？お、俺も少し、興味・・・あるから・・・。」

ヤ、ヤベェ。目が虚ろだ。コイツ目覚めちった・・・。

「よ、芳樹？お、俺。も、もう・・・！」

ギャーーーーーーーーーー！！！！！

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

学校遅刻しちまった。あのあとの事は・・・思い出したくない。

「よう遠藤！お前今日も遅刻かよ。留年しちまうぞ～。」

ギロッ！

「な、なんだよ、怖い顔して・・・」

「・・・・・ジャストシュマッシュ（当然の一撃）！！！！」

「ぼげらっ！」

夏休み

「え～。で、あるからしてっ、夏休みは非常～っに気がゆるみやすい。」

バタッ

「なのでしっかり気を！引き締めて！楽しい夏休みをすごしましょう」

バタッ

「え～、話は変わりますが・・・」

バタッ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝30分後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「それでは話を終わりにします。楽しい夏休みを。」

あの野郎話長すぎるだろ。校長特権か？

「これで閉業式を終わります。一同、礼っ」

やっと終わった～

「このあと、生活指導の先生からの連絡が・・・」

あ、意識が・・・・・・・・バタッ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「・・・くん、・・・藤くん、・・・遠藤くん！」

「うおぇ？」

「あ、気づきました？」

「多分」

「よかった〜。ナツが「鬼がついてる」なんて言うからしんぱいしちゃいました〜」

う〜ん？どんな状況だ？

「閉業式で倒れた」

「うわっ！」

「失礼な反応だ。芳樹。」

「そうですよ遠藤くん。ナツにお礼を言わないとダメです。倒れた遠藤くんを保健室まで運んできてくれたんです」

「憂(ゆう)も手伝った。」

あぁ、思い出した。校長のせいで倒れたんだ。

「で、今日倒れた人数は？」

「あなたを入れて２３人です」

いつもより少ないか。

「軟弱だな、芳樹。」

「うるせぇ」

勝手に話を進めているが、コイツらの事を紹介しないとな。

まず、この敬語を使うのが瀬野崎憂佳（せのさきゆうか）。

で、もう一人の背の低い、無表情がナツ（本名不明）。

二人は仲が良く、小さな頃からの友達らしい。ちなみにナツの本名は瀬野崎しか知らないと言う噂がある。

瀬野崎は面倒見が良く、ナツのお姉さんみたいだ。そしてナツは口数が少ない不思議系。オカルトが好きらしい。

「黒魔術とかやってる」

と自慢気に言ってきた事がある。嘘だろうとバカにした次の日、捻挫したのは偶然だと信じたい。

二人ともクラスメイトで、ナツが俺になついた事がきっかけで、瀬野崎とも話すようになった。

「なあ瀬野崎、今どんな状況？」

「今校内にいるのは私たち3人と先生だけです。」

「マジ？」

「マジです」

「芳樹のせいだぞ」

「なんでたよ」

ナツはいつもいきなり話に入ってくるな。

「じゃあもう帰りましょうか。先生方に迷惑かけてしまいますし」

「帰ろう」

「そうだな。遅くして悪いな、瀬野崎。」

「いえいえ」

「ナツにも謝れ、芳樹」

「やなこった」

「フフフッ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「じゃあまた、夏休み明けに」

「はい。遠藤くん」

「うん、バイバイ、芳樹」

「バイバ～イ」

さて、帰るか。

お祓い

「ただいま～」

「おかえり芳樹～」

「おかえりなさいませ、芳樹様」

・・・あれ？何か多くね？

「お邪魔しております、芳樹様」

「あ、ええと、どちら様？」

「陰陽師だとよ。俺を祓いにきたんだと。」

野菊が不機嫌そうに答えた。

「この野郎二時間ぐらい前にいきなり来て、

「あなたを祓います！」（ものまね入ってる）

とか言いやがった。どういう事だ？なんで知らない奴にドア開けた瞬間死ねって言われなきゃなんねぇ。」

大分怒ってんな。しかも似てねぇし。

「ええと、とりあえずお名前は？」

「申し遅れました、わたくし、陰陽師の花開院椿（けいかいんつばき）と申します。」

「えと、椿さん。ご用件は？」

「この家に取り付いた鬼を祓いに来ました。」

「その鬼と言うのは野菊ですよね？」

「はい。」

何かこの人怖いな～。

「おい何やってんだ芳樹。そんな奴早く追い出せよ。」

「だまりなさい魔性（ましょう）の物。あなたとは話をしていません。」

「なんだとクソ女！」

「おい落ち着け！」

身を乗り出す野菊を止める。野菊と椿さんは気が合わないらしい。当たり前か、鬼と陰陽師だからな。

「と、止めるな芳樹！俺はやらなくちゃいけないんだ！みんなが！みんなが待っているんだー！・・・・・たはっ！」

言いながら倒れるモーション。こいつ俺のマンガ勝手に見やがった。

「何ふざけているんですか。」

そして椿さんの冷たいツッコミ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

椿さんは野菊を祓うために、わざわざ京都から来たらしい。椿さんの家は代々陰陽師をしていて、椿さんはそのあととりになる修行中らしい。椿さん曰わく、野菊は早く祓わないと俺が不幸になるらしいんだが・・・

「ですから、今すぐお祓いしましょう。それがあなたのためであり、野菊のためなのです。」

「勝手に決めんなクソ」

今日の野菊はことさら機嫌悪いな。

「祓うっていうと、野菊はいなくなってしまうんですよね？」

「はい。祓う＝殺す、と思ってください。」

イヤイヤイヤ、怖いって。なんで静かな顔でそんな事言えるんだ。

「まったく、なんて野郎だ。まるで殺人鬼だな。」

「殺人鬼？鬼はあなたでしょう？」

「なんだと！？」

「まてまてまて！」

さっきと同じパターンじゃねぇか。

「・・・すみませんが椿さん、お祓いは遠慮します。」

「え？」

驚いた顔だ。

「で、でも、早く祓わないとあなたが不幸になりますよ？」

「なんて言うか、今野菊がいなくなる方がやなんですよ。どんな不幸かわかりませんが、野菊がいなくなる事が不幸なんじゃないかなと。」

「キャー！芳樹イイ男っ！」

うるせぇな。

「つーわけだ、陰陽師！とっとこ京都に帰れ！ほれほれ、上洛じゃー！」

「調子に乗りすぎだ。」

ゴツンッ！

「いてっ」

「なんだとっとこって。ハム太郎か。」
「いいじゃんか～。」
「・・・んんん～～～」
あっ、椿さんいるの忘れてた。
「いいんですか！？不幸になるんですよ！？」
「え、えぇ。」
「・・・そうですか。なら、いいです。」
「すみません、わざわざ京都から来てもらったのに。」
「明日も来ます！」
「え？」
「明日も来て説得します。」
「また京都から？」
「今日は近くで宿を借りていますから。」
「マジかよ」
「それではまた明日。失礼しました。」

と言って椿さんは出て行った。

明日は野菊を病院に連れてく予定なんだけどな〜。

診察

「よしっ、じゃあいくか。」

「どこに～？」

「病院」

「いってら～」

「いってき～。椿さん来たら祓われないようにきをつけろよ」

「やっぱいってやるよ」

「よしおっけ」

野菊も椿さんは苦手らしい。まぁ、自分を祓おうとする人を好きにはなれないか。

病院へは電車で１０分ぐらいだ。野菊は初めての病院＆電車だが、まあ大丈夫だろ。普通にしてれば。

「こんなんじゃ俺はとめられないぜ！おりゃっ！」

「馬鹿、改札飛び越えんな！」

先が怖いな～。マジ静かにしててくんね～かな～。

そんな事を言ってたらもう着いた。案外、野菊は静かだ。

「おい野菊、ここでおりるぞ」

「お、おう」

難なく、いや電車おりるだけで難があるわけないか。と思ったが現実はあまくない。

「よ、芳樹・・・。」

「ん？何だ？」

「よ、酔った・・・おうぇっ」

「わわわわっ！まて！ここで吐くな！」

なんで電車で１０分ゆられただけで酔うんだよ！てか電車そんなに揺れなかったんじゃね？

「兎に角便所だ！便所にいくぞ！こい！」

急いでトイレにきた。

「ここで待ってるから行ってこい！」

「んん！いっしょにきて！」

「馬鹿女子便だろ・・・っていててて！髪の毛ひっぱるな！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「よ、芳樹・・・。ダメだ、こんなところで。せまいよぉ。
んあぁっ。だ、ダメ。もう我慢出来ないっ。俺、もおっ・・・

オエエエェェェェェェェエエエエェェーーーーー」

便に入ってくれてよかった。野菜は・・・別に気にしないだろ。
てか何でこの野郎、俺をひっぱってきやがった。でも野菊が男子
うわきたねっ！見ちった。俺もはきてぇ。

「うぅー。気持ち悪い〜。」

「多少は楽になったろ。もういくぞ」

野菊の手を引いてトイレを出ると、そこにいる全員が俺を睨んで
いる。ここ男子便だよな？普通野菊を変な目で見るだろ。
野菊を見ると、虚ろな目で下をむき、顔を赤くしている。

「わ、私、オトナになっちゃ・・・」

「黙れ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

以外にも診察は早く終わった。その理由が・・・

「あ～ムカツク！何なんだ！電車で酔いながらはるばるきてやったのに解らないって！医者だろ！？」

「まあまあ、落ち着けよ。医者にも解らないことあるんだよ」

「しかも聞いた？「様子見ましょう」ってもう様子見てきたんだよ！」

「わかったわかった。なんか買ってやるから」

「服買え」

男っぽいんだか女の子らしいんだか・・・。

服

さて、無事診察も終わって帰りたい気分だがそうはいかない。野菊の服を買う事になった。

思えば野菊は自分の服を一着しか持ってない。

普段は俺の服を着て、今日みたいに出掛ける時は自分の服を着る。勝手に俺の服を着るのはどうかと思うが、上手く着こなして全く違和感がない。

まぁ、とりあえず適当な物を買おう。男用の服でもいいだろ。いい感じに着てくれるし。

「おい芳樹、こんなのはどうだ？」

「あーぁ、いいんじゃなーいのっ」

「ちゃんと見ねーと爪剥ぐぞ？」

何でそんな怖い事が簡単に言えるんだか。

「お前なら大丈夫だろ、何でも似合うし・・・・・・え？」

「そうか！？似合うか！？まさか芳樹からそんな言葉がでるとは思わなかった！よし決めた！これにしよう！」

「いやいやいや、いや、いやいやいや。それはどうよ」

「あんだよ、何か文句あるか？」

嬉しそうな野菊の手には白と水色のかわいいフリフリワンピース

がある。

「芳樹が似合うなんていってくれるなら、俺毎日これ着ちゃうかもっ！」

うわ～。超嬉しそうだよ。迂闊に似合うなんて言うんじゃなかった。もうちょっとクールな奴買うのかと思ったら、白と水色のフリフリて。

「おい芳樹っ、何してんだ、早くしろっ」

「な、なあ野菊。まだ時間あるしもうちょっと見てみないか？」

「まさか芳樹がそんな事言ってくれるなんてっ。今日の晩ご飯は何がいい？何でも頑張って作ってやるぞ？」

メッチャ女の子やん。話聞いてねぇし。

まぁ、こんなに喜んでるんだからいいか。そこまで変でもないだろ。

「化け物がそんな物を着るのですか？」

「あぁん？」

ゲッ、この声は・・・。

「何だよ陰陽師。テメェこそ陰陽師らしく巫女服でも着てろ。キモマニアなら喜ぶぜ？芳樹とかな」

「陰陽師は巫女服なんて着ませんわ。でも芳樹様が喜んでくださ

るなら着ようかしら。あなたから芳樹様を奪いとってあげますわ」

この二人、仲の悪さが普通じゃないな。しかも勝手に人の好み決めやがって。いや嫌いじゃないよ？むしろ好きだよ？

「お前じゃ奪えねぇよ。それに芳樹は俺の事が好きなんだ。他の女になびいたりしねぇ。行くぞ芳樹」

「お、おう」

「申し訳ありません芳樹様。家にお伺いしようと思ったのですが少しやる事が出来てしまいましたので、後日に致します。」

「あ、はい。じゃあまた今度」

「別に来なくていいぞ。その方が平和そうだからな」

「・・・・・・・・・・・・・・ん。」

？椿さんがなんか困ったような顔だ。いや、悲しそうな顔か？どっちにしても気になるな。

「芳樹様」

「何ですか？」

「・・・・・・・・・・・・野菊と生きるなら、覚悟はしておいてください。とりあえず・・・・・・今日あたり・・・・・・」

「え？」

椿さんは俺の耳元で、小さな声で呟いた。
野菊に聞こえないように。

「何してんだ？早く帰ろうぜ」

「あ、あぁ。じゃあ椿さん、また今度」

「はい。時間をとらせてしまい申し訳ありませんでした。くれぐれも、お気をつけてください」

＝＝＝

角

「ただいまー」

「おかえりー。ただいまー」

「おかえりー」

もうこんな時間か。

色々、主に野菊の電車酔いなんかで大分疲れたがなんとか帰ってこれた。

もう風呂入って寝たい気分だが、野菊が夕飯を作ってくれるらしいので少しだけ待とう。どうせ明日も休みだから遅くまで起きていてもいいだろう。明日は一日中寝る事になるだろうけど。

「芳樹～、風呂入ってろよ～。その間に作ってるから～」

もう風呂の用意してくれたのか。

最初は、いきなりこの家に住ませろとか言われて迷惑だったが、こういう所は凄く感謝してる。

召使いになれとかいってたけど、あれは多分素直に泊めてもらうのが恥ずかしかったのだろう。結構かわいい所があるんだ。

「おい聞こえたかー？早くしろよー。それとも一緒に入りたいのかー」

「今はいるよー」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・何かオカンみたいだな。

＝＝＝

《覚悟はしておいてください。とりあえず、今日あたり》

《とりあえず、今日あたり》

！！

「野菊！」

＝＝＝

俺はどうしていいか分からない。

「は、早くッ、お願いだから早く逃げてくれ！！」

「一体どうしたんだ！お前がこんななのに逃げれるか！」

「お、お願いッ、お願いだからぁ！！」

見間違いだろうか。頭を押さえる野菊の手の隙間から、尖った白い物が出てきている。

「あ、ああッ、よ、芳樹、逃げろォッ」

俺はどうすればいいなのだろうか。

野菊のために何かしてあげたいが、どうすればいいのかわからない。

何も出来ない自分が悔しい、憎い。

「逃げて、芳樹。た、頼むからッ、逃げて・・・・・・・・・・・・・・・

グアァァァァァァァァァァァァァァァ！！！

」

目の前の野菊、いや、これは野菊か？

髪を振り乱し、頭には角が生え、尖った爪を見せ、

牙を剥き出しにした、まさに鬼が目の前に立っている。

だがその鬼の目には悲しい涙がにじんでいた。

鬼

「グアァァァ

「ガァァッ！！」

ズガッ！

「うあぁっ！」

避けきれず、包丁は俺の腕を裂いた。

どうにか、どうにかして止めなければ。
逃げる事は簡単だ。
でも、ここで逃げたら野菜はどうなる。
絶対に逃げてはいけない。
野菜を見捨ててはいけない。
野菜は俺のために頑張っている。
俺のために苦しんでいる。

・・・・・・・・・・・・・野菜に比べたら、こんな事くらい・・・。

「グァァァァァァァァァァァァァァッッッ」

野菜は、包丁を大きく振りかざした。
今だっ！

「野菜ーーーーー！！！！」

勢いよく野菜を抱きしめた。

グサッ

「ぐあぁっ！」

包丁は俺の背中を貫いた。

「だ、大丈夫。もう大丈夫だ、野菊。
心配するな。俺がいる。
いつでもお前を止めてやる。
すまない。お前を苦しめてしまって。
でも、もう大丈夫だ。
お前が俺のためになってくれたように、
俺もお前のために、何でもする。
そのためなら、腕も背中も痛くない。
それ以上に、野菊が苦しむ事の方がつらい」

「グ・・・、グァァッ・・・・・・」

抱きしめる力を少し強くする。

「だから、これからは二人で頑張ろう。
お前の中の鬼が暴れたら、俺が絶対止めてやる。
お前のためなら、何も怖くない。
大丈夫。もう何も怖くない、心配しなくていい。
苦しまなくて、いい・・・・・・・・・。」

野菊が俺の腕の中で泣いている。

「・・・・・・ゥ、うぅぅ・・・・、あ、ありがとう芳樹。
ありがとう、ありが、とう・・・・・、ありがとう・・・・」

「泣くなよ、らしくないな。
お前にはもっと、もっといっぱい笑ってほしい。
もっといっぱい、お前の笑顔が見たい」

「う、うん、うん！
わ、わかった。
いっ、いっぱい・・・・・・笑うから、もっといっぱい、
いっぱい笑うからッ」

「・・・・・・

見舞い

「体調はどうですか？芳樹様」

「もう大分良くなりました。いつもすみません、椿さん」

「いえ、芳樹様のためですし、それに・・・・、それに、私がもっと注意していたらこんな事にはなりませんでしたから」

「い、いえいえいえ！椿さんの言うことを聞かなかった俺が悪いんですよ！椿さんのせいじゃありませんよ！」

「ありがとうございます。でも、陰陽師として恥ずかしいです。事件を未然にふせげなかったのですから」

「すみません」

「いえいえ！芳樹様のせいではありませんから！」

「「あ、」」

「ハハハ、」

「ふふふっ」

あの後、心配した椿さんが駆けつけてくれて俺は病院に運ばれた。幸い命に別状はなく、あと三日間もすれば退院できるそうだ。

入院生活は暇じゃないかと思ったが、椿さん、瀬野崎とナツ、ついでに横山なんかが見舞いに来てくれてさほど暇じゃなかった。

ただ心配なのが・・・・・・、

「あの、椿さん。野菊はどうしてますか？」

「・・・今日も、来てないみたいです・・・・・」

「そ、そうですか～、まあアイツ料理できるから飢え死にはしないでしょう、アハハハッ」

「・・・・・・

ピンポーン

「・・・・・・いないのかしら」

ピンポーン

「野菊ー、私よー、椿よーー」

ガチャ

あら、ドアが開いてる。やっぱりいるじゃない。

「野菊ー、勝手に入るわよー？」

返事はない。まあ入っても大丈夫でしょう。

「おじゃましまーす」

変わってない。前来たときと全然変わってない。
靴の置き方、半開きのドア、空気すら変わってない。
嫌な予感がする。本当に変わってない。まさか・・・・・・！

「野菊！！」

急いで台所にいくと、血の付いた包丁を持った野菊が膝を抱えてうずくまるように座っていた。

「何やってるのよ野菊！！まさかあの日からずっとこのままでいたわけ！？」

野菊の手足は青白く変色している。間違いない、ずっとこのままでいたんだわ。

「とりあえず立ちなさい！何か作るからまってて！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いらない」

「何言ってるのよ！あれから何も食べてないんでしょう！？何か食べないと死んじゃうわよ！？」

「いらない」

「ダメよ！ちゃんと食べないと・・・・・・・」

「いらないっていってんだろ！！腹減らねえんだよ、あの日から！！ずっと何も食べてねーのに全然腹が減らねえ！全然動いてねーのにどこも痛くならねえ！なぜだかわかるか？俺が鬼だからだ！化け物だからだ！」

「野菊・・・・・・」

「頭の角もはえたままなんだ。芳樹に会いたい。怪我の看病もしてやりたい。でもこんな角があったら芳樹に会わせる顔がないだろ！化け物のまま、芳樹に会えるわけないだろ！

またお腹が減った時に芳樹のクソ不味いオムライスが食べたい！芳樹が買ってくれた服で一緒にデートしたい！でも、もうダメなんだ。腹は減らねーし角ははえたままだ。　芳樹のオムライスも食えねーし、芳樹が似合うって言ってくれた服も、角があったらきれねぇ。俺は、もう化け物なんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・あなた、馬鹿？」

「あぁ！？」

「芳樹様がそんな事気にすると思う？芳樹様はあなたが鬼とわかった上で一緒に住んでたんでしょ？それをいまさらなによ、角がはえたくらいじゃ芳樹様はきにしないわ」

「てめぇなんかになにがわかる！！」

「じゃあ自分で確かめればいいじゃない。角のはえた頭で芳樹様が買ってくれた服をきて、芳樹様に会ってみればいいじゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「私もう帰るわ、元気になったみたいだし。お腹がすかなくても一応何か食べなさい。自分で作れるんでしょ？芳樹様がいってたわ。それともうすぐ退院できるみたいだからちゃんと片づけしておきなさいよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・言われなくてもちゃんとやらぁ」

「そう、じゃあまたね」

「・・・・・・・・・・・・・・」

＝＝＝

「あーーーっ、退院だ！！」

俺は伸びをしながらいった。まわりで何人かがへんな目でみたがきにしない。気にしたら心折れそうだし。

「退院おめでとうさん、遠藤くん」

「お世話になりました」

「もう来ないようにするんたぞ」

「はい」

何か犯罪おかしたっけ？

まあいいか、これから自由だ。思いっきり遊ぶぞー！

・・・・・・・・・・・・結局、野菊は一度も見舞いに来なかった。

椿さんの話では元気らしいけど、やっぱり心配だ。

「芳樹様～」

遠くで椿さんが手を振っているので恥をかかないように急いで駆け寄る。

「椿さん、来てくれたんですか？」

「はい、退院おめでとうございます、芳樹様」

「ありがとうございます」

「いえいえ、じゃあ早速帰りましょうか」

「はい。そういえば、椿さん京都に住んでるんですよね？ずっとホテルに泊まってるんですか？」

「その話は今度改めてお話いたします。今日は芳樹様の退院をお祝いしましょう？」

「あ、はい。ありがとうございます」

違和感がある。そして恐怖感も。椿さんの様子がおかしい気がする。何かあるな。

＝＝＝

ってかっこよく決めよう。よしよし、いくぞ！

ガチャ

「ただいまーーーーーーーあ？」

どうした？クラッカーの音がしないぞ？

「お、おかえり、芳樹。退院おめでとう」

「あ、どうもー・・・・・」

クラッカー＋ゆかいな仲間達のかわりに、白と水色のフリフリなワンピースを着て、頬を赤くした可愛い女の子がいる。そしてその女の子は、頭に角がはえている。まさか・・・。

「えーと、間違ってたら悪いんだけど、その・・・野菊？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

「エェェェーーーーーーー！！！！！」

大声だしちった。でもなんだって？この子が野菊！？

信じられん、野菊ってこんなにかわいかったか？

いや、嘘だろ。野菊ってもっと、なんかこー、ちがかったもん。

「本当に野菊ですよ、芳樹様」

「へ？」

「そ、その、退院祝いに、色々作ったから、その、食えっ」

「か、かわいい」

「えっ？」

やべっ、声に出ちった。

「よ、芳樹、今かわいいって・・・・・・」

「い、いや、さっきのは」

「よしきーーーーーー！！！！」

「わ、馬鹿っ、抱き付くなっ！！」

「ふふふっ、今だけは良いじゃないですか、野菊の好きにしてあげても」

・・・・・・そうだな。俺も少しだけ、こうしていたい。

Partｙ

「はい、あ～んっ！」　これ野菊。

「あ、あーん」　で、これ俺。

「・・・・・・・・・」　これは椿さん。

「うまいか？」　また野菊。

「う、うん。んまい」　で俺。

「・・・・・・ふぅ」　つい溜め息が出る椿さん。

「じゃあもうイッチョ！あ～んっ」　ハイテンション野菊。

「あ、あぁ」　これまた俺。

「・・・・・・あの」　そうだ椿さん。早く言ってくれ。

「どうした？芳樹」　いやいや野菊さん。

「あ、あのさ」　もうそろそろさ。

「ね、ねぇ野菊？」　そうだよね？椿さん。

「早く食えよ、芳樹っ」　もういいよな？

「ジブンデクエルカラー！ツバキサンモイルカラー！」

「え？」

「え？じゃねぇよ！」

「あ、ありがとうございます、芳樹様」

＝＝＝

「なにが？」

「俺、芳樹の事刺しちゃったんだぞ？」

「あぁ、その事か。あの時言ったろ？俺は大丈夫だって」

「俺、角もはえたままなんだぞ？」

「いや、角って普通ひっこむのか？」

「俺の事、怖くないか？」

「ははははっ、怖いわけないだろ？むしろかわいいし」

「芳樹～～～。・・・・・・大好き！」

「こ、こらっ、いきなり抱きつくなよ」

「いいじゃんかっ、久しぶりなんだから～」

「・・・・・・・・・・・・・・バカップル、ですか」

あ、椿さん居るの忘れてた。

「ここまで仲がいいと、見ているこっちが恥ずかしいです」

「す、すみません」

「なんだ椿、餅でもやいてんのか？」

「こら野菊っ」

「・・・・・・すこしだけ、ね」

え？

つーか、前より野菊と椿さんの仲が良くなってる気がする。何かあったのか？

まぁ仲がいいのは良い事だ。人間って言うのは友情で成り立っているんだ。

ピンポーン

お客さんか？誰だべ。

「芳樹様は座っていてください。私が出ますから」

「あ、ありがとうございます」

椿さんはすぐに戻ってきた。

「誰でした？」

「男性でしたが間違えたみたいです」

家を間違えるのも珍しい。団地だからかな？

ピンポーン

まただ。

「今度は俺が行ってやるよ」

「悪い野菊」

そしてまたすぐに戻ってきた。

「誰だった？」

「女が二人。間違えたって」

二連チャン。少なくとも隣の家とは似てないと思うけど。

プルルルルー

電話だ。次は俺の番だな。

「もしもし、遠藤ですが」

「（芳樹か？俺だ、直哉）」

直哉？誰だ？俺知らないぞ？

「えーと、どちら様？」

「（とぼけるなよ、俺だ。横山直哉）」

横山？俺の知ってる横山は・・・あぁ、横山か。クラスメイトの。

「（もしかして芳樹、俺の名前忘れてた？）」

「そんな事ねぇよ、ちゃんと思い出した」

「（忘れてたんじゃねぇか！）」

うわっ。電話で大声だすなよ、耳いてぇ。

「で、何のようだ？」

「（いやさ、お前の退院祝いやろうと思って、瀬野崎さんとナッツンつれてお前んちの近くまで来たんだけどさ、お前の家分かんなくなっちって）」

「勝手に人んちで祝おうとするなよ。今どこだ？」

「（お前んちと間違えて二回もピンポンされた不幸な家の前）」

まじかよ。一回目が男で二回目が女二人って言ってたな。横山と瀬野崎とナツ、完全一致じゃねぇか。

「その不幸な家をもう一回不幸にしてやれ。じゃあな」

「（お、おい芳樹っ・・・）」

ガチャッ

玄関でまつか。

ピンポーン

「はーい」

「うわっ、何でいるんだ？」

「俺の家だから。まあ入れ」

＝＝＝

丁寧に返す椿さん。

「けっ」

不愉快そうな野菊。

「おい野菊、ちゃんとあいさつしろよ」

「あぁ？」

コイツの沸点はどんだけ低いんだ

「しゃあねえな」

そうそう、ちゃんとあいさつしないと。友情はあいさつからだぞ。

「芳樹の嫁の野菊だ」

おい野菊っ！嫁はダメだろ！

「おいおい芳樹～、友達どころか嫁までいるのかよ」

「遠藤くんのお嫁さんですか、うらやましいです」

「角はえてる。鬼嫁」

「「「「えええぇぇぇーーーーーーーー！！！！」」」」

マジで仲良いな。説明がめんどくさそうだ。

友情

「さあ、説明しろ芳樹」

「大丈夫、私は遠藤くんを信じてるから」

「信じてるぞ、変態芳樹」

もうめんどくせーよ。特に最後の奴が。

だがしかし、ここで説明を怠れば、俺の残り少ない学園生活が台無しだ。

野菊にあいさつしろなんて言うんじゃなかった。嫌まてよ？まさか、こうなる事を予想して真面目にあいさつしたんじゃなかろうか。

いやいやいや、何考えてるんだ俺。野菊は俺の事を夫だと思ってくれてるんだぞ？そんな野菊を俺は疑うのか？

きっと、野菊もこの状況をどうにかしようと・・・・・・笑ってやがる。あの野郎はめやがった。

「お前がこんな奴だとはおもわなかった」

「野菊さんのご両親にもちゃんと謝らないと、遠藤くん」

「死んで償え、変態」

もうガンガン来てるよ。完全に俺が悪者じゃん。

しゃあねぇ、良い感じにいいつくろうか。

＝＝＝

「つーわけだ。俺は断じて悪くない」

俺はほとんどの事を話した。

どうして出会ったか、何故この家に住む事になったか、野菊が何者か、今回俺が入院した理由。

自分でも驚く程、口から言葉が出てきた。あとはこいつらが信じるかだ。

「ま、マジかよ」

「し、信じられません、そんな事が・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

まぁ、当然の反応か。こんな話、信じる方がどうかしてる。

「・・・・今話した事は全部忘れてくれ」

そうだ。それが一番良いのだろう。今更だけど、これは俺と野菊の問題だ。こいつらを巻き込むわけにはいかない。

「・・・・・・・・・・・・・・ナツは信じるぞ」

え？

「ナッツンだけじゃねぇぞ。俺も信じる」

「わ、私も信じます！」

「な、なんでだよ。なんでこんな話信じるんだよ」

聞いてはみたが、本当は知っている。

俺達は友達じゃないか。固い絆で結ばれた、友人じゃないか！

そんな友達の言う事を、何故疑う必要がある？

そうだ、俺達は友達だ！

「何故信じるかって？そんなの当たり前だろ？」

あぁ、ありがとう横山。

「そうですよ、遠藤くん。当たり前です」

ありがとう瀬野崎。

「決まってるぞ、芳樹」

ありがとうナツ。

「だって」

「だって！」

「だって！！」

そうだ、俺達は！

「「「野菊さんに角はえてるじゃん」」」

・・・・・・・・・・・・・・・・へ？

「野菊さんに角はえてたら、大体の事が真実だろ」

「付けてる感じしませんもの。ねぇ？」

「うん、妖気、感じる」

あれ？友情は？
固い絆で結ばれた友人は？
友情より角二本？

「良かったじゃねぇか芳樹、話の分かる友達でよぉ」

「すごいです。こんなに簡単に妖怪の存在を信じる人なんて、陰陽師やってて初めてです」

待ってくれ。状況が良くわからないんだが。

「よしっ！じゃあ退院祝いパーティー再開だ！とりあえず自己紹介、芳樹のクラスメートの横山直哉でっす！」

「遠藤くんのクラスメートの瀬野崎優花です～」

「芳樹の腐れ縁、ナツ」

あ、友達って言葉が出なかった。リアルで心が痛い。

「芳樹の嫁の野菊だ」

「陰陽師の開花院椿です」

・・・・・・一応、退院祝いしてくれるんだよな。

「・・・・・・遠藤芳樹です。野菊の・・・・・・」

「家族、かな」

一日

「起きろ！芳樹！」

「起きてる」

朝から元気な奴だ。理想としては

「おはよう芳樹、良く寝れた？」

みたいに優しく起こして欲しいが、相手が野菊なら叶わぬ願いだろう。さっき想像した人おチチが大きかったし。その時点でもうダメだよね。

「背骨引っこ抜くぞ？」

あれ？聞こえてないよね？

＝＝＝

がしたいなら・・・お、俺は、良いケド・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・思春期か？

＝＝＝

「イタリアンか、初めてだ。初めてといやあ、ラーメン何かも初めてだな」

前に食ってたよ。

「・・・・・・・・・・・・・ラーメンにするか」

＝＝＝

「んー？」

「き、今日は・・・・・・一緒に寝ないか？」

「お前一緒に寝るて」

「ば、馬鹿！変な事妄想するんじゃねぇよ！」

お前だよ。

「いいぞ、枕持って俺の部屋来いよ」

「ま、枕はいらない」

「首痛くなるぞ？」

「芳樹のを一緒に使うから・・・・・」

・・・・・今日の野菊はやけに甘えてくるな。

＝＝＝

「いいよ、気にするな」

「角、はえたままだ」

「大丈夫、野菊は野菊。変わりはしない」

「・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「・・・芳樹・・・・・・・・」

「なんだ？」

「スゥー・・・・・・・スゥー・・・・・・・」

寝言か。

あ、野菊のよだれが。俺の枕なのに。

思った以上に平常心が保てない。

一週間

月曜日

芳樹は俺より早く起きていました。

「何時に起きたんだ？」

と聞くと、１１時と答えました。頭がおかしくなったのかと思って、病院に行くように勧めましたが、時計を見ると午後１時でした。昨日の夜に遅くまでテレビを見ていたのが悪かったと思います。

火曜日

今日、野菊が「相方」という刑事ドラマの、頭がいい方の人のモノマネをしていました。

野菊は自信満々でしたが、正直あまり似ていませんでした。

水曜日

角はまだはえたままです。

芳樹は気にするなと言ってくれましたが、やっぱり女の子として角があるのは恥ずかしいです。

「え？女の子？」

ゴンッ

木曜日

昨日野菊に殴られた頭がまだ痛いです。
いつもいつも一方的に殴られているので、仕返しをしようとしましたが、女に手を挙げるのは気がひけるので止めました。

優しい男は好きですか？

金曜日

今日もいい天気です。俺は女なのに、いや、女の子なのに一人称が「俺」です。イメージチェンジをしようと思います。

「吾が輩の名は野菊である！」

土曜日

二次元の女の子は絶対に可愛い。オタクが恋するのも当たり前だ。だって容姿、性格、スタイル、すべてがそのキャラに恋をさせる為に設定されているんだ。
だから分かるか？
「二次元に恋する奴とかキモイ」とか言う奴なんて糞くらいだ！
二次元最高！！

「芳樹？何かあったのか？浮気したと見ていいか？」

日曜日

「一週間どうだったよ」

「糞だな。吾が輩は凄くつまらなかった。芳樹のせいだ」

「吾が輩やめろよ。前の方がよかったぞ」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「客が一人も来ないって芳樹、お前どんだけ友達いないんだよ」

「い、痛い、心が痛い」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「明日どこかいくか」

「どこに？」

「決めてない」

「・・・・・・芳樹と一緒ならどこでもいいよ？」

「じゃあ家でもよくね？」

「・・・・・・・・・・」

「今日何日だっけ」

「えーっと、３１」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「明日から学校だ！！！」

ジブンヲナグサメル

「行って来まーす」

「いってらっしゃーい。早く帰ってこいよー」

「おーう」

今日から学校だ。なんという爽やかな朝！
生徒もまだ歩いていない。きっとクラスで一番だろう。起こしてくれた野菊に感謝だ。

「・・・・・ちょっと寄り道してもいいかな・・・」

いやいやいや、駄目だ。そうやって何回遅刻したことか。寄り道なんかせず一番で学校にいって皆を脅かしてやろう。

＝＝＝

・・・・・・・・・・・・・・・寄り道欲に耐えられなかった。

＝＝＝

「よーしっ、じゃあ歌うかー！」

「「おー！」」

つー訳でカラオケに来た。
こいつらと遊ぶ時は基本カラオケだ。
まあ飽きないからいいけど。

「じゃあまずは私からーっ！」

「よっ！瀬野っち！」

「ユーウッ、ユーウッ」

一番は瀬野崎か。瀬野崎っていったらあの曲か。

「私の歌を聴けー！！」

ほら来た、有名なアニソンだ。瀬野崎は以外とアニメが好きらしい。女の子だからＢＬとかが好きなのかと思ったら、割とギャルゲーが好きらしい。

「二次元の女の子って可愛いですよね～。どうですか？遠藤くん。この子なんて、凄く恥ずかしそうな顔してっ。もぅ～溜まりませんっ！」

とか言ってたな。

・・・・・・・・・・・割とそう言う子好きかも・・・・・。

「じゃあ次は俺な～」

今度は横山か。

「俺の歌を聴けー！」

お前それ関係ないだろ。まぁ言いたくなるけど。
横山はま～、流行ってるアイドルの曲とかだな。
特にエピソードはない。

「次はナツだ」

「頑張って、ナツ～」

「頑張れナッツンツン！」

続いてナツ。ナツは流行りの歌とかは知らないらしい。
歌う曲はー・・・・よくわからん。聞いた事もない歌手の歌とか歌ってたな。

「今日は皆が知ってるヤツ歌うぞ」

おぉ、珍しい。何歌うんだろ。

「芳樹も蝋人形にしてやろうかー！」

何故限定されている。

＝＝＝

「いや～、楽しかった！芳樹も混ざってカラオケなんて久し振りだったな」

「そうですね～、やっぱり遠藤くんが居た方がいいですね～」

「芳樹、乙」

おい待て、俺の知らない間に三人でカラオケ来てたのか。俺だけ誘われなかったのか。

「まあ怪我してたんだからしょうがないよな～」

あぁ、俺入院してたんだった。

なんか救われたわ。

「じゃあまた明日な～」

「明日は遅れちゃ駄目ですよ？遠藤くんっ」

「また明日だ、芳樹」

「おう、じゃあな。また明日～」

もうこんな時間か。野菊待ってるだろうし早く帰ろ。

＝＝＝

この声にこの音、もしや野菊、自分を慰める行為をしているのか？
あ、あり得る。良くパソコンでこっそり見る大人向けアニメであるぞ？
結婚したのに、その、夜の営みがない妻がよく、自分を慰める行為をしている。
まさにその状態じゃないか。野菊最近そう言うのに敏感だし、一応野菊は俺を夫だと思ってるんだ。
明らかにそうじゃないか。野菊は今自分を慰める行為をしている。
どうしよう。チョー緊張してきた。逃げるか？一旦玄関までいってもう一度大きな声で「ただいま」と言うか？
いやいや、男としてどうよ。今まで我慢してきた自分を慰めるている野菊が可哀想じゃないか。
男として、夫として、覚悟を決めろ芳樹！大人になるんだ！
行くぞ！父さん、母さん、俺は今から、大人になります！！

バッ！

「今まで悪かった、野菊！だがもう大丈夫だ！俺も覚悟を決めた！もう自分を慰めなくていいんだ！」
「よしっ、覚悟はいいらしいなぁ芳樹。今何時だと思ってんだ？はやく帰って来いっていったよな？今まで待たせたんだ、歯が全部無くなるくらいは覚悟しろよ？」
あれ？なんか違くね？自分を慰めてるんじゃないの？
「っておい！お前何食ってんだよ！」
「クッチャクッチャ、ガム、クッチャ」

「クッチャクッチャうるせーな！いっぱいあったろ！全部食ったのか！」

「うるせー！こんだけ待たせたんだ！ガムの１０個や２０個くらい無くなるはボケェ！！」

「いやなくならねーだろ！いつからクッチャクッチャしてんだ！」

「朝」

「お前暇かよ！」

「暇にしたのはテメェだろ！学校なんかいきやがって！」

何言ってんだこの女。意味分からん。あーたまおかしーんじゃな～いの～～。

「とりあえず仕置きだ。このガムで窒息しろ」

こ、こいつ、こっちは自分を慰めてるんじゃないのかと心配したのに～～～・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・オ〇ニーでもしてろ！！」

あ、言っちゃった。

名前

「じゃあな遠藤～」

「おー、また明日ー」

長い一日が終わり、ついに放課後になった。いや、長かった。特に数学が。

「このあと何か用事はありますか？遠藤くん」

「よぉ瀬野崎。ナツとアイツ、え～と、誰だっけ？一緒じゃないなんて珍しいな」

「し、親友の名前くらいちゃんと覚えてあげてくださいよ・・・」

親友ね～。名前なんだったっけかな～。

「一緒に帰ろうと思ったら私だけ省かれちゃったんです！私頭にきちゃいました！」

「ほぉー、マジで珍しいな。瀬野崎だけ省かれるなんて。どうしたよ」

「しりませんっ！ナツと横山くんの事なんていいですから、どこかに行きませんか？」

「わかるよー、その気持ち。俺なんていつも省かれてるもん。いいぜ、遅くならなかったら」

「ありがとうございます。私達だけで楽しんじゃいましょっ」

また野菊を怒らせないように早く帰らねーと。

＝＝

「到着です～」

瀬野崎に連れてこられたのは、どうやらアニメのグッツばかりを取り揃えた店らしい。

見たことあるアニメもあるが、ほとんどが知らないアニメだ。多分深夜にやってるんだろうな。

「遠藤くんは初めてですか？」

「まあな。ナツとか横山とかとは結構来てるのか？」

「いいえ～。ナツも連れて来たことないんですよ？ここに私の友達を連れて来るのは、遠藤くんが初めてなんです」

ほー、ナツも連れて来てないなんて、これは栄誉な事なのか？

「なあ瀬野崎、」

「あ、あのっ！」

「え？な、何？」

「あ、あの、二人きりなので、ゆ、優佳って・・・呼んでくれませんか？」

「優佳？ああ、瀬野崎の名前？まあ瀬野崎がそう呼んで欲しいなら、別に断りもしないけど」

「え、遠藤くん、私の名前忘れてました？」

あらら、みるみるうちに瀬野崎が小さくなった。

化学反応かしら。

「い、いやいや、忘れてないですよ？瀬野崎の名前はちゃんと覚えてるよ？」

「優佳って呼んで下さいっ」

「あ、あぁ。えーと、優佳？」

「あっ、ああ～んっ」

うわっ、なんかすげー色っぽい声出した。

「え？あっ、すみませんっ！」

そしていきなり謝った。

「・・・実は私、ナツ以外の人に名前で呼んでもらうのって初めてなんです。だ、だから、その、少しいい気分になっちゃって」

「へー、そうなんだ、優佳」
「ああんっ！・・・・あ、す、すみません」
「いや、気にしなくていいよ、優佳」
「はぁんっ！」
「じゃあ店の中見てみるか」
「あ、あの遠藤くん？やっぱり名前で呼ぶのは・・・・」
「優佳」
「あは～んっ！」
やべぇ、大分おもしれえ。
「大丈夫？顔赤いよ？優佳」
「ああんっ！や、止めて、も、もう、私・・・」
「どうしたの？優佳」
「あああぁぁぁぁ～～～～んっ！！！」
うわばっ、思った以上に声出しやがった。周りの人全員こっち見てる。
「ブヒヒッ」

「テメェ写メ撮んなキモオタ！ブヒヒッて言うなブヒヒッて！」

やばい、一刻も早くここから立ち去らないと。

「おい、一旦場所変えよう！立てるか？優佳」

「はぅあああぁんっ！わ、私、おかしくなっちゃうぅ～ん！」

＝＝＝

「もう落ち着いた？」

「はい、すみません、迷惑かけちゃって」

「いや、俺が悪いから」

「違いますっ、遠藤くんのせいじゃありません。私が名前で呼んでなんてたのんだから・・・・」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「今日は帰ろうか」

「そ、そうですね。今日は帰って落ち着きたいです」

「家まで送ろうか？」

「いえいえいえ！そんなに迷惑かけられません！」

否定はえー。

＝＝＝

「おう、またな優・・・・」

「んうっ！」

「せ、瀬野崎」

「・・・・あ、あの、私、名前で呼ばれるのなれますから、また名前で呼んでくださいね？」

「あぁ、協力するよ。じゃあな、瀬野崎」

「はいっ、ありがとうございました、遠藤くん！」

さ～て帰るか。この時間なら怒られまい。野菊に何か買っていってろうかな。

止めよ、金ないし。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝翌日＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「よう遠藤、朝からいるなんて珍しいな」

「雪、ふる」

「よお、横山、ナツ。昨日どこ行ってたんだ？大変だったぞ」
「まあ色々あるんだよ。それより瀬野崎が妙にご機嫌だったけど何かあったのか？」
「優は芳樹と二人きりになれたから嬉しいんだ」
そんな事もないと思うけどな。
「まさか芳樹、野菊さんがいるのに瀬野崎とイイ事やっちったんじゃねーのー？」
「許さない、芳樹」
「それはねーよ」
あるわけないよ。
「おはようございます、横山くん、ナツ」
「おう、おはよう瀬野崎」
「優、おはよう」
噂をすればなんとやらだな。
「おはようございます、遠藤くんっ」
「おはよう、優佳」

「おぉ、芳樹が瀬野崎の事を名前でよんでる！」

「んあぁっ！だ、ダメ、ですよ、みんな見てますから」

「ああ、ごめん、つい・・・・」

「名前を呼ぶだけで感じさせるとは・・・。凄い事ヤったんだな。いや、感じさせるという事は・・まさか今も！？」

「芳樹、不潔。優、淫乱」

「テメェ等何言ってやがる」

「いんっ、そんな言葉どこで覚えたの！？ナツ！」

「せ、瀬野崎の中にはブルブルふるえる大人のオモチャが・・・・」

「「入ってねぇ！
入ってません！」」

登校

「オハヨー」

「おせーぞ芳樹、朝飯作ってあるから早く食え。そして今日は買い物いくぞ」

「ワリーけど今日も学校だ。普通学校は一週間、土日以外は学校だからお前に付き合えるのは二日間だ。次の休みまで待っててくれ」

「あぁ～？なら今日は休めよ～」

「あのな～、休みが多いと留年しちゃうんだよ」

「リュウネン？」

「簡単に言えば、また今の学年の勉強をするんだ。ヤバければ永遠高校生って事」

「意味わかんね。つまり俺より寺子屋みてーの方が大切ってか」

寺子屋て。

「別にそう言う訳じゃねえけどよー」

ピンポーン

お？こんな朝から誰だろ。

「誰か来たから話は一旦終わりだ。兎に角今日は休めないから」
「あっ、テメェ！」
誰だか知らないけど感謝だな。朝から訪問は少し迷惑だけど。
「ハイハイどちら様～？」
ガチャ
「おはようございます、芳樹様」
立っていたのは椿さんだ。ただ妙なのは・・・・・・
「あの～、椿さん？それってうちの学校の制服じゃないですか？」
「はいっ、芳樹様とお揃いです」
あ～、何か可愛い。朝から景気がいいな～。
「実は、芳樹様と同じ学校に転校したんです」
「マジですか！？家京都じゃないんですか！？」
「野菊の事もあるのでこっちに引っ越してきたんです。
私一人暮らしになったんです」
「いつからですか？今日？」
「えーと、二学期が始まった時からですけど・・・」

「へー、気づかなかった。何組ですか？」

「三組です」

三組？俺も三組だよな。親友の名前を忘れる俺でも、転校生が来たら流石に気づくぞ？

「芳樹様は二年生ですよね？学年が一緒なら同じクラスだったのですけど・・・・。残念です。」

あぁ、学年が違うのか。

「椿さんは何年なんですか？」

「すみません、まだ歳を教えていませんでしたね。芳樹様の一つ下の十六です」

「あ、俺より年下だったんですか。ずっと同い年だと思ってました」

「そうならよかったのですが・・・・。本当に残念です」

何か年下とは思えないくらい気品があるなー。野菊もこんななら いいのに。

「何か言ったか？」

「うわっ！」

ビックリした～。

「朝からなんか用かよ椿」

「えぇ、今日は芳樹様と一緒に学校に行こうと思って」

「あっ、まだ用意出来てないんでちょっと待ってて下さい。急ぎますから」

飯も食ってねぇや。椿さんも遅刻にしちゃ悪いから早くしないと。ちょいちょい野菊が役に立つ。

「なんだよお前も学校かよ。そんなにいいもんかね」

「えぇ、凄く楽しいわよ。芳樹様と二人きりにになれるし」

「芳樹はやらん」

「嫁の父かっ」

「あのよぉ、前から思ってたんだけどよー、芳樹と俺で話し方違くね？」

「・・・・・・・・・」

「椿？」

「・・・・・・・・・」

「おーい椿ー？」

「少し黙りなさ・・・・」
「お待たせしました椿さん」
「いえいえ、全然待っていませんよ？」
「おいつば・・・・」
「少しだけ黙って・・・・」
「行きましょうか椿さん」
「はいっ！」
「おいっ」
「じゃあ野菊、行ってくるから。戸締まりしとけよ」
「じゃあ行ってきますね、野菊」
「お、おい」
「「行ってきまーす」」
ガチャッ
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・んだよ」

＝＝＝

「野菊の元夫の子孫が居ると言う噂があるんです。少しでも野菊の為になるなら、あってみたいとおもって」

「・・・・・・さ、さあ、野菊が待っていますよ？早く帰りましょう」

「え？あ、あのっ」

＝＝＝

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした野菊」

「・・・・・・・・・何でもねぇっ」

何だ？

学校！

よしっ。準備オッケだ。

ピンポーン

お、来た。タイミングバッチリ。

ガチャ

「おはようございます、椿さん」

「おはようございます、芳樹様」

「おーい、野菊ー。行ってくるからなー」

「・・・・・・・・・・おう」

「じゃあ行きましょうか、椿さん」

「はいっ」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝放課後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

今日は俺から椿さんの教室に来てみた。

「椿さーん」

「芳樹様、すみません来てもらっちゃって」
「いえいえ、登校の時は椿さんが来てくれるので」
「ありかとうございます。では、行きましょうか」
「はい。あの、視線が怖いっすね」
椿さんのクラスの人の視線がスゲー怖い。
そして時折聞こえてくる・・・・・・
「ねぇ、あれが開花院さんの彼氏？」
「年上なんだー」
「わざわざ放課後迎えに来るなんて、亭主関白じゃない」
「実は開花院さん、本当は付き合いたくないんじゃない？」
「男の方がしつこ過ぎて仕方なく付き合ってるとか」
「うわ、サイテー」
「開花院さん可哀想ー」
散々行ってやがる。
「あの、椿さん。凄く勘違いされてますけど」
「そうですねー。こういう時は」

？

スルッ

「うわっ！」

椿さんはいきなり腕を組んで来た。

「ちょっと椿さん、これじゃもっと勘違いされちゃいますよ！本当に付き合ってりみたいになっちゃいます！」

「誤解を解く為です。芳樹様が亭主関白なんて。私が好きだから付き合っていると思わせれば、芳樹様の誤解が解けます」

はぁいー？

「いや、それじゃ肝心な所の誤解が解けてませんよ！」

「さあ、早く帰りましょう、芳樹様っ」

ギュッ

む、胸が、おチチがあたっとる。

＝＝＝

「おーう、ただいま。じゃあ椿さん、本当に送ってかなくていいんですね？」

「えぇ、大丈夫です。すぐ近くなので」

「気をつけてくださいね？」

「はい。じゃあ、明日の朝も来ますから」

「ありがとうございます。じゃあまた明日」

「さようなら」

いつも俺が送ってもらって、なんか男として不甲斐ないな。

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした？野菊」

「・・・・・・・・・・・・・・・あーーーーっ！！！！」

「うわっ、なんだよ」

「テメェ朝から椿といちゃつきやがって！お前には俺と言うかわいい嫁がいるんだから学校なんていってねーで俺に付き合え！」

「だーかーらー、次の休みまで少し待っててくれって」

「じゃあ椿といちゃつくの止めろ！浮気行為だ！」

「いや、いちゃついてねーよ。同じ学校だから一緒に行くのは普通なんだよ」

「っせー！！浮気行為だ馬鹿芳樹！俺より椿の方が大事か！学校の方が大切か！」

「そう言う訳じゃねぇって・・・・・・」

「貴様死ねーー！！」

「うわっ、まて！どこからそんな木刀・・・・・・・ギャーーーー！！！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「おはようございます、芳樹様」

「お、おう、おはよう、椿」

「・・・・・・・・何してるの？野菊」

「お、俺は芳樹だぜ？野菊なら二階で寝てるぜぇ？」

「・・・・・・・・・・・・・何してるの野菊。それ芳樹様の制服よね？」

「芳樹なら二階で寝てるぜ？」

「じゃあ、野菊は？」

「野菊なら二階で寝てるぜ？」

「じゃあ、あなたは？」

「芳樹だぜ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・何してるの野菊」

「うるせぇな！俺は芳樹だって言ってんだろ！芳樹が俺で野菊が芳樹！」

「あなた結局野菊じゃない！」

「芳樹だぜ？」

「黙りなさいっ！本物の芳樹様はどこ！？」

「昨日木刀で頭打って寝てる」

「絶対野菊がやったんでしょ！」

「俺は芳樹だぜ？」

「・・・・・・めんどくさっ」

＝＝＝

「さあ野菊、なぜこんな事したの？」

「そうだぞ野菊。まだ頭いてーぞ」

「・・・・・・・だって。芳樹俺より学校の方が大事だから。俺も学校がどんな物か気になって」

「それで俺を半殺しにして、お前が俺になって学校に行こうとしたと」

うーん、コイツ思った以上に馬鹿なんじゃね？背もちげーし声もちげーし性別だってちげぇ。唯一同じなのが同じ人間って事・・・・・・・・・・・・・これもちげぇ。

「つまり、学校に行きたかったのね？」

「・・・・おう」

「いやー、どう考えても無理だろ。生徒じゃないと校門すらくぐれないぞ？」

「・・・・・・じゃあ俺も生徒になる！」

いやいやいや、それは無理だて。

「あのねぇ野菊、学校って思う以上に大変なのよ？週二日しか自由な日はないし、毎日勉強よ？それでもあなたは学校に行きたい？」

「おうっ！」

「そう、ならいいわっ。今すぐ学校行けるようにしてあげるから」

「いや無理ですよ！何勝手に決めてるんですか！」

「「？」」

「いや、？じゃなくて！学校行くにも金が必要なんてすよ？家に野菊を学校に行かせる金なんてないですよ！」

「その事なら大丈夫です。お金は全て開花院家が持ちますから」

「いや、でも・・・・」

椿さんは耳打ちしてきた。

「陰陽師的にも野菊が家に一人で居るより、私や芳樹様の居る学校の方が安心出来るんです。大丈夫、開花院家で上手くやりますから」

何者なんだ開花院家。

「やったじゃねーか芳樹！俺もが野菊に行けるぜー！」

もーどうとにもなれっ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝二日後＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「手続きは済ませました。今日からでも学校に行けますよ」

「よっしゃー！じゃあ早速行こうぜ学校！！」

「ただし！」

「な、なんだよ」

「今日は日曜日です」

「ズコッ」

先が思いやられる。不安しかねぇ。

美少女四天王

「え～、転校生の野菊さんです。野菊さん、軽く自己紹介してください」

「の、野菊だ。よろしく」

「じゃあ瀬野崎さん、勝手が分かるまで野菊さんの面倒を見てください」

「は、はい」

「野菊さん、とりあえず瀬野崎さんの隣の席に座ってください」

「お、おう」

「じゃあ次の国語の準備をして、先生が来るまで席についててください。瀬野崎さん、野菊さんの事よろしくお願いします」

「は、はい。了解です」

＝＝＝

野菊はどうしてる？うつぶせちゃってるよ。まぁずっとあのままなら安心だけど。

「遠藤くん、野菊さん授業中もずっとぼーっとしてましたよ」

「あぁ、知ってる。野菊の事が気になりすぎて、何の授業やってたかもわかんねー」

「ア、アハハ。野菊さんに話しかけてみた方が良いんじゃないですか？」

「え～、野菊の面倒は優佳の・・・・」

「あぁんっ！」

「わ、わりい。瀬野崎の役だろ」

「で、でも野菊さんは遠藤くんの家族・・・・」

「わあああーーー！！」

「あっ、すみませんっ！」

「気をつけてよ？その事は内緒にしてるんだから」

「は、はい。気をつけます」

「・・・・・・・・・しゃあない。話しかけてみるか」

「その方が良いと思います」

やっぱり同じクラスにしない方が良かったかな～～あ？
野菊の周りに人（主に女子）が集まってる。
「ねぇ野菊さん、前の学校はどこ？」
「い、いや学校は・・・・」
「どこに住んでるの？」
「え～と、わかんね」
「角かわいい～。それ本物なの？」
「い、一応」
「肌モチモチっ、いいな～っ」
「ば、馬鹿ッ。勝手にさわんなっ」
「声も可愛いよね、野菊さん」
「べ、別に俺は・・・・」
「自分の事俺って言うんだ。何かかわいっ！」
「は、はあ？」
・・・・ま、まぁ、一応人気のようだ。俺が話しかけなくても大丈夫だろ。

「あっ、野菊さん結構おっぱいある～っ」

何っ？

「ば、馬鹿野郎っ！いきなり胸を揉むな！」

「私にも触らせてー。あっ、ホントだっ。おっきーぃ」

「あ、や、止めろっ・・・・」

「私にもっ」

「止めろって！」

「わあっ、これ乳首？もしかして感じちゃってる～？」

「あ、ああんっ！や、止めてっ、つ、つまむなっ」

何かＡＶみたいになっちゃったよ。男子も遠目で見てやがる。

「てか野菊さんノーブラ？えっろ～い」

「え、え？ノーブラ？」

「野菊さん、夏服だからブラしないと汗かいたら透けちゃうよ？」

「ブ、ブラ？」

「ブラジャーよ。知らない？」

「あ、あぁ。椿が言ってたな」
「椿って一年生の開花院椿ちゃん？」
「お、おう。知ってんのか？」
「当たり前よ！学園三大美少女の一人だもんっ」
「ねぇ、野菊さんも三大美少女になれそうじゃない？」
「だとしたらぁ、学園美少女四天王じゃない？」
「うそぉっ！一学期まで二大美少女だったのに、二学期で一気に四天王になるの！？」
「な、何言ってんだ？」
あ～、前に横山が言ってたな。
この学校には二大美少女がいて、一人は現生徒会会長、二人目は現生徒会副会長。
二人共三年で、来年二人が卒業したら美少女いなくなるって騒いでたっけ。
「よかった～。椿ちゃんと野菊さんいるから、二人が卒業しても学園美少女がいるじゃない」
「野菊さんは椿ちゃんと仲いいの？」
「別にー」

「椿ちゃんと買い物とか行くの？」

「いいや」

「ブラの事は椿ちゃんと話すまで知らなかったの？」

「あぁ」

「へー。女の子なのに珍しいね」

「しらね」

「ブラ買わないの？」

「椿は買った方が良いっていってたけど、芳樹が買ってくんねーんだ」

「「「「「・・・・・・・・・え？」」」」」

あ、あの馬鹿ッ！何言ってんだっ！！

「よ、芳樹って・・・・・・遠藤芳樹？」

「おう」

ジロッ

し、視線が痛い。クラス全員が俺を睨んでいる。

「い、いや、違うんだ。別に俺の趣味じゃなくて・・・・・」

何言ってんだ俺、そこじゃないだろ。

「うわっ、遠藤最低」

「ありえねぇだろ、女子にノーブラ強要するなんて」

「糞ムッリーニ。死ねよマジ」

イタタタッ、痛いなー、何もかも痛い。

「ち、違うんですっ！え、遠藤くんはそんな人じゃありません！これには色々と訳があって・・・・」

「そうだ優佳っ、誤解を解いてく・・・・・・・」

「あはぅんっ！だ、駄目、止めて・・・・・遠藤くん。み、みんな見てる・・・・・・からぁ」

優佳ーーーーー！！！

「うわマジ最低っ！瀬野崎さんにまで手を出すなんて！」

「いくら瀬野崎さんが優しいからって・・・・・・・・最低！」

「同じクラスの女子を二人も人前で辱めるなんて、ありえねぇよな糞。死ねよ」

お、終わった。俺の学園生活、今日が最終日だ。きっと明日の今頃は部屋の隅でうずくまってる事だろう。

ガラガラッ

「お前等何してる！もう授業中だろ、お前等の授業は科学室の筈だ！何故教室にいる！」

いきなり二人の女子、多分三年生がはいってきた。

さっき怒鳴ったのは前に立ってる黒髪ストレートの女性で、その後ろには・・・・おっとりとした異常に胸がデカい、巨乳というより爆乳の女性が立っている。

「皆さん何をしているんですか～？集団で授業をさぼるなんて、先生が可哀想でしょ～？」

お、爆乳がしゃべった。思った以上におっとりしてる。

「申し訳ありませんっ！乙葉（おとは）様！雫（しずく）様！」

うわっ、どんな状況だ。俺と野菊以外、全員が土下座してる。優・・・・・瀬野崎すら伏してるよ。

「何故全員が授業を放棄している」

「何か訳があるんでしょ～？大丈夫、怒ったりしないから話してみて？あ、雫ちゃんはわからないけどね？ウフフッ」

何なんだ？この二人。偉い人なのか？てか、あんたらも授業さぼ

ってるじゃん。

「それが、そこに立っている遠藤芳樹という男が二人の女子にわいせつ行為をいたしまして」

「何！？」

「まぁ～、思春期かしら」

いや違うんだって。発言する勇気ないけど。

「被害者は誰だ」

「瀬野崎さんと転校生の野菊さんです」

「まぁ～、転校早々大変な目にあっちゃったわね～」

キッ

黒髪ストレートの、雫様？って人が睨んできた。今日一日でどれだけの人に睨まれなきゃいけねぇんだ。

「お前が遠藤か」

「は、はい」

「お前には生徒会室で話しを聞きたい。瀬野崎、それと転校生、お前等も来てくれ」

生徒会室？もしかして・・・・・。

「なあ瀬野崎、もしかしてあの二人・・・・」

「はい。生徒会長の乙葉さんと、副会長の雫さんです。抵抗は出来ないと思うので、生徒会室で誤解を解きましょう」

瀬野崎がいつも以上に真面目だ。

「早くしろ、時間が無いんだ」

「は、はい。おい野菊、お前も来い」

「お、おう。なあ芳樹、あいつ等なんなんだ？偉そうな口聞きやがって」

「それだけ偉い人なんだ。それと野菊、絶対に嫁とか言うなよ？」

「何で？」

「言った瞬間、学校に来れなくなると思え」

「お、おう」

さて、生徒会長さんと副会長さんと対談だ。気合い入れて話さないと、一瞬の隙を取られて退学になりかねない。

本当で行かないとな。

「ね、ねぇ遠藤くん」

「ん？なんだ瀬野崎」

「な、名前で呼んでくれないの？」

・・・・・・・・・この女、誰のせいでこうなったか理解出来てないらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5052w/

一つ家の鬼娘！

2011年11月30日18時04分発行